

先日、立教大学の先生方とお話しをする機会がありました。

「近頃の男子大学生は、教室に虫が入ってきたくらいで悲鳴をあげたり、大騒ぎをしたりする者が増えた。」とのこと。本校にも確かに虫の苦手なお子さんも存在します。

キャンプに行き、テントに虫でも入ろうものなら、断末魔の悲鳴のような声をあげて、虫よけスプレーを乱射するような児童もおります。しかしながら、そこは男の子。ダンゴムシを愛でたり、クワガタやカブトムシを飼育したりと、虫好きの子も多数存在します。

もう十数年前の話。私が教頭だった時、担任がお休みで、三年生のあるクラスに補教で入り、授業をし、日記に入朱をしました。その時にコピーをとっておいた日記のうちのひとつをご披露いたします。

四月二十二日 火曜日 晴れ

学校に行く時は、わからなかったけれど、学校から帰ってきた時せん面所となりでカサコサカサコソふ思ぎな音がしました。ぼくはどきつとしました。クワガタのしくビンの中から聞こえてきました。昨年五月八日お母さんに買ってもらったクワガタのよう虫がせい虫になっていました。うれしくて、びつくりしました。ゼリーをさがしクワガタに食べさせました。しばらくの間ゼリーを食べていました。そしてゼリーを食べおわって土

の中へしずかに、もぐって行きました。今日はクワガタのたん生日です。



男の子のみずみずしい感性があふれていて、あまりにすてきな日記だったので、コピーをとらせてもらったのです。

クワガタの誕生日は、卵が産まれた日なのか、孵化（Ⅱふか…卵が破れて幼虫になる）した日なのか、羽化（Ⅱうか…蛹から成虫になる）した日なのか、定かではありませんが、クワガタのしずかな、静かな「誕生日」。私もお祝いをしたくなりました。

学校の各教室にある月齢表示のカレンダーによると、本日、六月四日は「虫の日」なのだそう。語呂合わせによる記念日なのでしょうが、無視することもできず、今日は虫をテーマに「つぶやき」を書いていきます。書いているうちに思い出したのが、先日、古本屋さんで二百五十円で買った『無私の日 本人』磯田道史著 文春文庫のこと。

この本は磯田氏が「どうしても書きたかった」という三人の人物を描いた一冊。

仙台藩吉岡宿の造り酒屋の主人、穀田屋十郎（こくだや じゅうざぶろう）、儒者中根東里（なかね とうり）、尼僧大田垣蓮月

（おおたがき れんげつ）の三人の生涯を通して、「日本人の幸福」とは何かを考えさせられる本です。

穀田屋十三郎のご子孫の方が、磯田氏に先祖の偉業について、多くは語らず、「いえ、昔、先祖が偉いことをしたなどというてはならぬと言われてきたものですから。」と、恥ずかしそうに語られたこと。中根東里は作った文章をすべて火に投げ入れ、絶後の名文と言われた彼の詩文はこの世からすべて失われたこと。高名になれば、潤筆料で稼ぐのが常道であった江戸の世に、短冊に和歌を書くのを頼まれても頑としてお金を受け取らず、歌集の出版も嫌がり、版木の損失を自ら償ってまでも出版を中止させたという大田垣蓮月。

この三人のブレない、信念を貫く生き方を読むうちに、さらに思い出してしまったのが立教学院の創立者、我らがウィリアムズ主教のこと。

ウィリアムズ主教は、一八七九年七月三十一日に遺書を作成し、その中で、伝記の執筆を望まないこと、手紙・説教・説教のメモ類を焼いてほしいということ、また、葬儀や墓標は簡素にしてほしいことなどを記していたそうです。無私の日本人。無私のウィリアムズ主教。「道を伝えて己を伝えず」。

一寸の虫にも五分の魂。たとえ五分であろうとも、「立教魂」を忘れずにいたいものです。（立教小学校校長 田代 正行）